

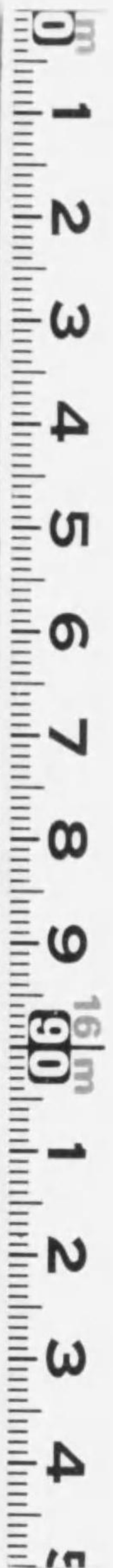
特255

436

鈴木和上
最後の垂訓

浄土真宗の極意

納本



始



3

3

鈴木和上略歴

鈴木和上は嘉永五年二月廿八日播磨今市正覺寺に生る、昭和十年五月三十日往生、享年八十四歳。

慶應三年八月得度、明治四十四年八月三日本願寺派の最高學階たる勸學職を授けられ、大正七年四月四日侍眞補を命ぜらる、大正十年三月十日佛教大學々長就任、同年六月三日龍谷大學昇格と共に初代の學長となり、十一年九月一日辭任、昭和五年三月四日勸學寮の寮頭となり、同年四月二十七日顯眞學苑の創設に際して顧問となり、更に昭和十年一月十九日には本願寺派顧問の要職に推され、三月十日侍眞を命ぜらる。

同年四月廿七日顯眞學苑の親鸞聖人研究館の落成式には滿悦のあまり進んで入洛して講說せらる、本書はその講說の速記にして實に和上最後の垂訓なり。

因にこの小照は親鸞聖人研究館落成式の當日、階上の露臺にて撮影せるものなり。

鈴木和上小照

鈴木和上略歴

鈴木和上は嘉永五年二月廿八日播磨今市正覺寺に生る、昭和十年五月三十日往世、享年八十四歳。
慶應三年八月歸度、明治四十四年八月三日本國寺派の最高學階たる
勲學號を授けられ、大正七年四月四日待異補を命ぜらる、大正十年三
月十日佛敎大學々長就任、同年六月三日龍谷大學昇格と共に初代の學
長となり、十一年九月一日辭任、昭和五年三月四日勲學號の授與とな
り、同年四月二十七日龍谷學苑の創設に際して顧問となり、更に昭和
十年一月十九日には本願寺派顧問の要職に推され、三月十日待異を命
ぜらる。
同年四月廿七日勲學號の授與勲人研究館の落成式には高僧のあま
り遠んで入浴して講談せらる、本誌はその講談の速記にして實に和上
最後の記事なり。
因にこの小照は親覺齋人研究館落成式の當日、階上の露臺にて撮影
せるものなり。

鈴木和上小照



鏡木味土小照

特 255
436

浄土真宗の極意

〔祖師聖人と一切經〕

鈴木法琛師述



皆様のお顔の見えるか

すでお聴取りが、難しいかも知れないと思つて居ります。成るべくはまあ皆さん方に聞えるやうに思つて話を致しますけれども、自分は今が八十四歳にな



ります。前年この學苑が建ちまして開苑式に此處へ参りました。其の時分にはこの階段を上るのに何の苦もなく上つて、他人様のお世話に預からないで此の階上の講堂へ上りました。が、此度はもう階段を上るのが、あちらの方やこちらの方に、手を持つて貰つたり、後ろから押して貰つたり、色にお世話に預かつて、漸く此處へ上つて來ると云ふやうな次第でございます。

蓮如上人が八十五歳で御往生になりましたが、八十四歳の御文章を讀んで見ると、當年夏頃から身の工合が悪いので今年には達者にて越せるか知らんなんぞと云ふやうなお

言葉があります。私にももう來年が蓮如上人の御往生の年でございます。如何にも蓮如上人が八十四になつてもう往生も近づいたのか、耳目手足身體こゝろやすからざるあひだ、なんとと、身が思ふやうにならぬからと言つて仰せられてあります。が、丁度蓮如上人のことを思ひ遣つて、もう是が皆さん方のお顔も見納めかと思ひます。どうぞまあ御法義を大切に喜んで下さいませ。

今回はこの學苑内に親鸞聖人研究館が立派に出來上りまして、際前も色々お書物が澤山にをさまつて居るのを見せさせて貰ひまして、うれしく存じます。この講堂から僅か

の階段を降りて土踏まずにこの研究館の方へ参られます
ことも便利で、いよく學苑も研究の設備が整うてきまし
た。

四

「顯眞」の二字と一切經

茲ではたゞ「顯眞」と云ふ二字が名前になつて居る、けれ
ども其の顯眞と云ふ二字を聞いてお話し申しますと、幾千
卷の書物があの今度の研究館に這入つて居りますが、あれ
が皆この「顯眞」と云ふ二字の所謂を、色々右から説いた
り、左から説いたり、縦から説いたり、横から説いたりしてあ

るので、みんなこの「顯眞」と云ふ二字を推廣めて釋明して下
さつたのであります。お釋迦様のお説きなされた一代教、
其のお釋迦様のお説きなされたお經文を菩薩方や人師方
が御講釋下された論釋さう云ふものをあの研究館にお集
めになつて居る次第であります。一反の布でも伸ばしま
すと此處から向ふの端迄も届く位になりますけれども、卷
いて疊んで懐へ入れると何のことはないませぬ。もうお
釋迦様のお説きなされたお經文だけでも七千餘卷、菩薩方
や人師方の御講釋の書物を合せますと、一切經と云つても
七千卷八千卷の書物である、仰山嵩の高い書物になる。し

五

かし色々様々にお説き分けなされてありまして、巻いて疊んで申しますと、南無阿彌陀佛と云ふ六字の中に這入つてしまひます。巻いて疊めば南無阿彌陀佛、擴げて頂けばあの研究館に一杯になつて居る何千巻と云ふお書物がみんな南無阿彌陀佛のお謂れをお知らせなされて下さる外はないのであります。

御開山が御年が五十二歳、稻田の御庵室でお書きなされたお書物を教行信證と申します。この教行信證が御開山の御教化の骨格である、この教行信證の四法を開きますと、色々様々のおみのりが出て來るのであります。

教理行果の通軌

全體眞宗を除く外の天台宗ちやとか眞言宗ちやとか華嚴宗ちやとか法相宗だとか云ふやうな色々々の宗旨は教行信證とは申しませんので、教理行果と云ふのであります。

教と云ふのは教、お經、其の教に説き明してあるものは道理、天地の間、宇宙の間、もつと廣い大宇宙に遍満して居るまことの道理を説き明したのがお經文で、其の教理、其の道理を實行するのが行、其の行によつて悟を開くのが果である。それで一般の佛教で申しますと、教理行果と云ふ。御開山

のみ教より外の御宗旨はみんな教理行果と云ふのであり
ます。 八

「心地観經」と云ふお經があります。其の「心地観經」の中に、
教理行果の四法は、年で云うたら春夏秋冬、春があつて其の
次に夏、秋、冬となる、春夏、秋、冬の四季が一年にあるやうなも
の。また、東西南北の四方の如くであつて方角に南、北、東、西、
東、西、南、北、東、西、南、北の四方がある、と等しい、方角に四方があ
り、年に春夏秋冬の四季があり、佛のみ教に教理行果の四つ
がある。かう云ふことをネ、昔の人がお經の講釋に書いて
居ります。もう何年經つてもどこへ行つても、變らぬもの

が春夏秋冬の四季、東西南北の四方、これはもう京都ばかり
ぢやない、どこへ行つても東西南北と云ふ四方があり、春夏
秋冬の四季がある。丁度それと同じやうに、佛の教は教
理行果の四つの外はない。華嚴經でも教理行果、法華經で
も教理行果、涅槃經でも教理行果、一切經も澤山あるけれど
もどのお經文に現れて居るみ教も教理行果の四つの外は
ない。かう云ふことをネ、心地観經の講釋をなされた戒度
と云ふ人の「聞持記」なんぞにもさう云ふことを詳しく書い
てあります。

御已證の教行信證

然るに御開山はネ、教理行果と仰せられずと、教行信證と名前を變へて仰せられてある。これが皆さん方や私等が、喜ばねばならない有難い御教化であります。教行信證と言葉を變へて、教理行果と仰せられずと、教行信證と言葉を變へて、四法は四法ぢやけれども、名前が違うとる。教理行果ぢやない、教行信證ぢや。

まあ教理行果で申しますとネ、華嚴經ならば事々無碍法界とか、法華經で申しますれば一念三千、諸法實相、十如是な

んぞと云ふやうなことが説いてある。其の外聖道門のお經や論釋は皆教理行果。まあ法華經で云つて見ますと、法華經と云ふお經に説いてあるのは、一念三千、三諦圓融、諸法實相と云ふお謂れが説いてある。それが教によつて理が顯れ、其の理即ち道理を實行するのが行ぢや、其の行によつて悟を開くから教理行果といふ。華嚴經ならば華嚴經と云ふお經が教ぢや、其の教に顯れた事々無碍法界と云ふのが理ぢや、其の事々無碍法界の觀法を實行するのが行ぢや。其の行によつて悟が開けるのが果や。それで教理行果。

聖道は行じ難い

皆さん方や私等が出来るか出来ぬか考へて御覽うじ、お釋迦さんがお悟をお開きなされた時に、お釋迦さんの眼に映つた模様をお説きなされたのが華嚴經ぢや。事々無碍法界と云ふ道理は私等が讀めばわかります、けれども道理がわかるだけで實行することが出来ない。浅間しい煩惱ばかりを朝から晩迄。もう吾々も年が寄つて、前年參つた時分には何の苦もなく上つた階段が他人様のお世話に預らねば上られない、僅かの間、谷本先生なんぞのお話なんぞ

も拜聴しようと思つて居りましたが、何だか頭痛がするやうな情ない有様で、暫く休ませて貰つて居つたのです。こんなことでは却々事々無碍の修行が出来る筈がない。一念三千の觀法が出来る筈がない。

御開山は御手本

御開山がネ、定水ヲ凝スト雖モ識浪頻リニ動キ、心月ヲ觀ズト雖モ妄雲猶覆ヘリ」と仰せられました。御開山は私等のお手本をお書き下さつたから、私等と同じやうな心中であつたと云ふことをお示しなされて居る。觀念の床にあ

なうらを組んで、眞如の月影を拜まうと、心の水を静めよう
と思つて見ても、欲しいぢやの、憎いぢやの、可愛いだの、あれ
が濟まぬこれが濟まぬ、あれがかうした何がどうしたと云
ふやうに色々の煩惱の心の浪が立つて心の水がちやんと
静まらない。静まつた水にこそ月影が圓く映ります、浪が
動き立つた水には圓い月影は映りませぬ。かやうな浅間
しい心中であるでないか。濟むの濟まぬの、朝から晩迄煩
惱を拂ひ除くことの出来ないやうな私は、却々眞如法性の
月影のまん圓に私の心には映りはしませぬ。きれん／＼に
なつて映るか、菱なりになつて映るか、月は映りますすけれど

も圓い月影は映りませぬ。「妄雲猶覆へり」雲が覆ひ、浪立つ
て眞如の月を拜むことは出来ない。そのわしの浅間しい
心中をさげましたお互の身の上に対応して下さるみ教は
南無阿彌陀佛より外にはございませぬ。

お六字の不行

それで御開山が、教の次に理とは仰しやらんと教の次
に行と仰しやる、教の巻の次にお示しなされたが行の巻。
南無阿彌陀佛のお六字が大行ぢや。南無阿彌陀佛と云ふ
六字は佛様のお手許に出来上つたものぢや。佛様のお手

許に出来上つたものだけども、この佛様のお手許に出来た南無阿彌陀佛は、私の往生の因種として御成就を下された佛さんのものが即ち私のもので、私のもものが佛様のもの、生佛不二の南無阿彌陀佛を御成就下された。

教によつて顯れるものは理でなくして行ぢや。それぢやから其の行を受け取らせて貰ふのが信ぢや。信願行の三資糧と申しまして、佛になりまするのには、信心と願と行との三つが要る。信願行の三資糧。所が眞宗を除くの外、御宗旨で御沙汰をなさるのには、信も願も行も私共が拵へるのぢや。さうして願行迄行かぬと佛になる種にならぬ、た

だ信と云ふものが起つても其の信で佛になると云ふ譯に行かない。佛さんのお説きなされたお經文は深い御謂れがある、結構なお道理があると云ふことを信じただけでは佛になれない。信じて願を發さんならん、發願をせんければならぬ。菩提心を發さんならぬ。その願がありさへすればよいかと云ふと、信はあり願があつてもまだ、佛になることが出来ない。それで今度行と云ふものが出来る。六度萬行、諸波羅蜜の行。天台宗や華嚴宗と云ふやうな御宗旨は實大乘と云ふ、大乘の至極だと仰しやるが、ネ、生血を搾り皮を剥いで三僧祇百大劫かゝつて修行せよ、と云ふや

うなことは仰しやらない。煩惱即菩提生死即涅槃、ウンと
力を入れたら今此處でもこの煩惱心が眞如の月影の映る
立派な心に變るから、それでウンと〱力を入れて觀法を
せよ。まあ道理はさう云ふ道理かと思ひますけれども、觀
法に力を入れて考へ見てもこの煩惱心と云ふものが綺麗
な眞如法性のお道理に適うた心は起りませぬ。定水を凝
すと雖も識浪頻りに動き、心月を觀ずと雖も妄雲猶覆へり。
皆さん方はどうか知らぬけれども、ネ、かやうに喋舌つて居
る私はもう何とも早申しやうのない淺間しい心中を持つ
て居ります。人様には高うに買うてお貰ひ申せば嬉しか

らうけれども自分で自分の心を眺めて見るとお恥かしう
て皆さん方にお話が出来ない。惜しいと思ふ心がやんだ
と思へば憎いと云ふ心が起つたり、羨ましいと云ふやうな
心が起つたり不足な心が起りましたり、邪見な心が起りま
したり、朝から晩迄あとから〱起りまする心の働きは却
却佛様になる種にはなりません。〱
慾は餓鬼腹立種は地獄なり
愚痴畜生と知れよみな人
淺間しい心中をかゝへて居ります。それぢやから南無阿
彌陀佛のお六字の外は一切皆悉く私に相應し下さらない。

願行具足の名號

南無阿彌陀佛と云へば阿彌陀如來様の大願大行によつて出來上つた、如來様のお願、如來様のお仕事、五劫の思案と永劫の修行とで出來上つた結果が南無阿彌陀佛。この佛様の願行があなたの願行かと云へば、一々誓願爲衆生故「お父さんと息子さんとの間に一枚の羽織があるやうなもの、お父さんが着たり息子さんが着たり、出來上つた羽織が親子相持ちや。南無阿彌陀佛の出來上り方が衆生のものなり佛のものなり、如來様のものなり私のもの、如來様の正覺

御成就の果名のなりが、感果を無善のわれらにゆづる——願行は菩薩のところにはげみて感果は無善のわれらがところになり成ず、世間出世の因果ことはりに超異せりと安心決定鈔にお示しなされてあります。願も佛體に成就して吾等に御廻向下さるのが南無阿彌陀佛、願も南無阿彌陀佛に籠つて居る。願行具足と云ふ南無阿彌陀佛であるから貰うた信心一つに願行がちやんと揃ふ。それが名高い善導様の六字釋、南無ト云フハ即チ是レ歸命、亦是レ發願廻向ノ義ナリ、阿彌陀佛ト言フハ即チ是レ其ノ行、斯ノ義ヲ以テノ故ニ必ズ往生ヲ得ル、それでネ、教行信證——御開

山のお書きなされた眞宗の根本の聖教、教行信證を讀んで見ると、教行信證が皆、顯眞實教、顯眞實行、顯眞實信、顯眞眞證、あの顯眞ですな。茲の「顯眞學苑」の顯眞ぢや。

眞實と方便

教行信證共に眞實のおみのりである。眞實に對するものは方便である。方便と云ふのは如來様が吾々の根機を調へる爲に當て事を以てお説きなされたおみのり、こゝまでござれ、甘酒飲まさうなと云ふことで、衆生を引つ張つてお出でなさる方便法としてお説きなされたのがあの一切

經の聖道門のお經が皆それでございます。

それで淨土眞宗で申しますれば阿彌陀様の御本願が、十八願と十九願と二十願、十八願が信心一つで往生といふ眞宗のみ教、十九願二十願と云ふのは如來様の御方便のお願。其の十九願の修諸功德と云ふ中にみんな一切聖道門の行が這入つて居る。

卷いて疊めば顯眞の二字、開いて申せば一切經。私は此處へ参りましたしてネ、この座に上りまして此處で話し、それから又此の段を降りまして土踏まずにまた研究館の方へ行く、顯眞學苑の顯眞と續いて居る譯、かう思ひました。如何

にもさうぢや。顯眞と云ふ二字で其のまことを顯はして下された方便を捨てよとお示しなされる。方便を捨て、まことに歸せよと云ふことをお示しなされるから、この顯眞からずつと傳つて向ふへ行く時に研究館がある、其の研究館には仰山なお書物が一杯這入つて居る。何千卷あつても何萬卷あつても私の佛になる道は南無阿彌陀佛のお六字より外にはないのだ。南無阿彌陀佛の外のみ教はお道理はわかるけれども實行が出来ない。華嚴の事々無碍のお謂れも、法華經の一念三千のお謂れも、解深密經のお謂れも、涅槃經のお謂れも銘々共が解らぬなりに研究をさせて貰

ふと、實に廣大無邊のお道理が説いてある。如何にも佛様から御覽なされたらかくも御覽なされるか。如來の眼に映つた宇宙の有様はこんなものか、吾々が實行して、この通りに修行をして行けば、かう云ふことが我身の得る所の悟になるのだと云ふことは、ネ、読んで見ますとわかります。わかりますけれども、其の道理の儘を行で受取らんならぬ。其の行が難しい。

歴劫迂廻の行

それで三僧祇百大劫の迂り路をすると云ふ權大乘と、一

念皆成なんぞと云ふ、ウンとく、力を入れ、ば迷即ち悟ぢ
やなんぞといふ實大乘と、迂り路を廻つて行くのとウンと
力を入れて一遍に佛になるのと、近路と遠迂り路とあるや
うでありますけれども、どちらを聞かして貰つても吾々が
行ずることが出来ない。

それで法然上人はわしらに一念三千、三諦圓融のお道理
は有難いけれども、斷惑證理を許すが故に尙ほ是れ歷劫迂
廻の行なりと法然上人が選擇集に仰せられて居る。

成る程一念皆成なんぞ申すと、弘法大師が親に生んで貰
つたこの身で佛の相が現はされると云ふことを、即身成佛

と云ふお道理を仰しやつた時分には、朝廷にお出での偉い
お方々が何ぼう空海が偉いと云つたとてそんなことが出
來るものかと云つて誰も信ずる者が無い。弘法大師が論
より證據ぢやして見せると云つて、手に印を結んで口に呪
文を唱へ心に一心に大日如來を念じなさると思ふと、ポッ
と虚空へ飛び上つて黄金の相を現はしなされた——弘法大
師が。清涼殿の立木までがみんな黄金の色に變つたとい
ふ。多勢居ります朝廷のお方々はそれを眺めて如何に
も空海の教はまことだと云ふことに感心したと云ふ話が
あります。まあ實際あつたものかなかつたものか知らぬ

けれども、道理を申しますると空海は實際加持成佛は出来
ただらう。顯得成佛と云ふことは命終つてから後であら
うけれども加持成佛は出来るだらう。弘法大師はやらし
やつたであらうけれども皆さん方や私等が却々出来る筈
はありません。私等の心からは鬼が出て佛は出ない。
餓鬼が出て佛様は出ない。

御門前の堀川の水

私はこの京都に長いこと御本山の學校に居りましたが
朝ネ、早う御本山へ参らうと思つて自分の居ります所か

ら出まする、時間がまだ早い、御門がまだ閉つて居る、これは
まだ早かつたと思つて、あの門の前の橋の上に立つて門の
開くのを待つて居りました。するとあの堀川の水を見ま
すと綺麗にみんな澄んで居る。ハテナ、堀川の水は染物を
洗うたり、色々の葱や牛旁見たやうなものを川上ぢや洗ふ
からいつもく濁つて居るのやとばかり思つて居つた。
いつもく濁つて居る堀川の水が朝早う御本山の御門の
開かぬ時分に眺めるともう上に誰も汚いものを洗はない
ものだから綺麗に澄んで流れて居る。それを見ましてネ、
私は懺悔をさせて貰つた。私のこの心根は、起きて居る間

は色々の煩惱の浅間しい汚い水が流れて居る私の心中ぢ
やけれども夜寝て居る夢の中夜明近うになりました時分
だけでも私の心が堀川の水見たやうに綺麗に澄むと結構
だけれどもお恥かしいことぢやけれども夜寝て居る夢の
中でも却つて晝の慾よりも餘計えらい慾を起して居る。
ちやんと私がお錢を拾うて袂へ一杯入れるやうな云ふに
云はれぬお粗末千萬な夢を見る起きて佛さんに申上げる
所の話ぢやない家内の者に話をして褒められようと思ふ
やうな夢は見ませぬ——滅多に。とりとめもない譯の分ら
ぬことを夢見て、其の中でも貪欲の煩惱、瞋恚の煩惱、堀川の

水は夜明近うには澄んで居れども私の心中の濁り水は片
時だけでも澄まないのだと懺悔をさせて貰つて、南無阿彌陀
佛々々々々々々とお稱名を喜ばせて貰つて居ります。

聞信の一念

私の往生の物種は、願を發すのぢやありませぬ、行を修す
るのぢやありませぬ。南無阿彌陀佛に願と行とが籠つて
居る。其のお籠りなされて居る南無阿彌陀佛のお六字を
聞其名號信心歡喜耳から心に受取らせて頂いて、かゝる徒
ら者を此儘ながら御助け下さるとは如何なるお慈悲様で

ござりまするか、たと、もう諦はて、如来様から下
さる南無阿彌陀佛を受取る、南無阿彌陀佛を受ければ其の
南無阿彌陀佛の中に大願大行が籠つて居る。南無と云ふ
は願阿彌陀と云ふは行願行具足機法一體、これが南無阿彌
陀佛のお謂れぢや。

善導様がネ、南無ト言フハ歸命亦是發願廻向ノ義、阿彌陀
佛ト言フハ即チ是レ其ノ行、斯ノ義ヲ以テノ故ニ必ズ往生
ヲ得ト玄義分にお示しなされてある。發願廻向と即是其
行とが南無阿彌陀佛に籠つて居ると云ふのが願行具足。
南無は機の方の信心、阿彌陀佛は御助け下さる法のお力、機

法が一體に南無阿彌陀佛が出来上つて居ると云ふ、機法一
體、願行具足が南無阿彌陀佛のお六字のお謂れたと云ふこ
とを耳から心に受取らせて貰ふのである。耳から心に受
取らせて頂くのが御當流の聞信と仰しやる。聞信と云ふ
のは他力を現はすみのりぢやと御開山仰しやつてある。
學問して佛になるの種を拵へるのぢやない、修行して身で
行の力を磨き上げて美しい心を宿らせるのでない、私の手
許は此の儘、生れついたり此のなりで、南無阿彌陀佛のお六
字を頂かせて貰ふならば往生一つは願力の不思議として
佛の方より往生は治定せしめたまふ。あの御文章が有難

いぢやないかネ。

「南無ト歸命スル一念ノ處ニ發願廻向ノコ、ロアルベシ」
往生は如來の方よりお定め下さる。私の方には何にも要らぬからたゞ、如來様のお力で参らせて頂くと受取る一つでお浄土へ参る、これが聞其名號信心歡喜ぢや。行で佛になるのでなし、願で佛になるのではない。如來様の願、如來様の行、其の大願大行が南無阿彌陀佛に封じ籠めて御廻向下さるから、なさぬ善根の主となり、積まぬ行の主となつて願行揃うた御信心のお蔭で未來はやすく、有難い幸せ。

御恩報謝の生活

そんならもう往生は願力の御不思議でお定め、未來のことは心配せなくてもよい。此の世五十年どうして暮しますか。それはネ、往生一つがまかされたら佛恩報謝と云ふことを忘れぬやうに、御恩と云ふことに心がすわりましたら人間の道を美しく履ませて頂き日本國民の本分を盡させて頂く。未來について心配はありませんで、日本國民ならば國民たる所の自覺を失はぬやう、親には孝行、君には忠義、世の中が變り行けば行くに随つて心得方も亦變らん

らんからよく、世の中の有様を見たり聞いたり、其の世の中の有様に相應して、其の後は人間の有様にまかせて世を過すべきこと肝要なりと皆々心得べし、これは私が言ふのでない、蓮如上人が仰しやる。御信心頂く、頂いたら人間は人間の有様があるからネ。今日の國民には今日の國民の有様がある。昔の國民には昔の國民の有様がある。今ぢやもう世の中が變つて居りました、今國民の有様はどう云ふ風に心得て行つたならばよいのか、どう云ふ風に國家を護つて行つたらよいのかと云ふやうなことは人にもよく教へて貰ひ、自分にも亦よく心得て、人が人の道を履みあ

やまたないやうに美しく履ませて頂くのが御法義を喜ぶ身の上の幸せでございます。これが正定聚不退轉の位に入らせて下された有難さぢや。

現益と當益

それで、雜行雜修自力ノコ、ロヲフリステ、其の振捨てるものを詳しく示し遊ばされたのが一切經華嚴經や涅槃經や法華經ぢやといふ。「一心ニ阿彌陀如來ワレガ今度ノ一大事ノ後生御助ケ候へトタノミ申シテ候」と云ふのが大無量壽經第十八願のみ教。至心信樂欲生我國の三信に

よつて十念の御相續をして芽出度う往生をするやう、三心トハイヘドモタゞ彌陀ヲタノムトコロノ行者歸命ノ一心ナリ」と蓮如上人が仰しやる。至心と云ふはまこと、信樂といふは疑はぬこと、欲生と云ふはお淨土參りと心懸けること、酒と酢と醬油と三つ合せた三杯酢、三杯酢やけれども、酒と酢と醬油と三遍に食べませぬ、一遍にグツと飲み込んだ中に、酒の味ひ、酢の味ひ、醬油の味ひ、味ひが三つあるから三杯酢。聞其名號信心歡喜吾々のやうなものを、かゝる機を此の儘に佛にして下さるとは何たる廣大なお慈悲ぞと頂かせて貰つた御信心の中に、至心と云ふ如來のまことも、欲

生と云ふ如來の大悲も無二の信樂の中にちやんと攝まつて居る。それを三信とはいへどもたゞ彌陀をたのみとこの行者歸命の一心なり、この歸命の一心のお蔭で、佛様が、わしは阿彌陀如來といふのぢやから、御信心を頂いて、往生一定の身の上となつたら、わしの名前は南無阿彌陀佛、お前の信ずる南無の信までわしの手許でこしらへて置いた程に、わしを戀しう思うて呉れるなら、明けても暮れても南無阿彌陀佛々々々々々と稱へて、人間道を美しく守り、若し生れずば正覺を取らじ。三信十念の心行を私の身に具へさせて頂いた幸せには出て行く未來は如來

様のお力にお任せして若し生れずば正覺を取らじ、私が佛
にならにや阿彌陀様は正覺を御取りなさらんといふ。私
の往生をかけたものに御成就なされた如來様の正覺ぢや
から佛様のお慈悲を頂いた身の上は嫌でも應でも、我がは
からひにて地獄へも墮ちずして極樂へ參るべき身なるが
故なり。有難いことでございますネ。

この顯眞學苑といへばこの講堂の佛前で佛様のおまこ
とをいたゞいて、あちらの研究館といへば其のおまことを
受取るについて釋迦如來が五十年間お説きなされたお經
文、このことを知らせなされて下さる外はないのぢやから、

御開山が正信偈に、

如來世に興出したまふ所以は

唯彌陀の本願海を説かんとなり

五濁惡時の群生海

應に如來如實の言を信ずべし

とお示しなされてあります。捨てものとりものを詳
しくお知らせ下されたのがこの釋迦一代の御説法だ。吾
吾の取るものは南無阿彌陀佛捨てるものが雜行雜修自力
の心。この通りに心得て現當二世の幸せを得たてまつる
のがお互の身の上でございます。これで御免を蒙ります。

| | | |
|------|----------|----|
| 顯眞學苑 | 如上人 | 五〇 |
| 顯眞學苑 | 白道人 | 五〇 |
| 顯眞學苑 | 法然上人 | 五〇 |
| 顯眞學苑 | 晚年の親覺聖人 | 五〇 |
| 顯眞學苑 | 般若心經講話 | 六〇 |
| 顯眞學苑 | 信仰と生活 | 四〇 |
| 顯眞學苑 | 佛敎の精華 | 五〇 |
| 顯眞學苑 | 佛敎の精華續篇 | 五〇 |
| 顯眞學苑 | 竹田聖徳 | 五〇 |
| 顯眞學苑 | 道味小品 | 五〇 |
| 顯眞學苑 | 大田佐實 | 五〇 |
| 顯眞學苑 | 愚禿 | 五〇 |
| 顯眞學苑 | 孟蘭盆經講話 | 六〇 |
| 顯眞學苑 | 大經五恩段講話 | 四〇 |
| 顯眞學苑 | 高子禮樂 | 五〇 |
| 顯眞學苑 | 無碍道 | 五〇 |
| 顯眞學苑 | 散華樂 | 五〇 |
| 顯眞學苑 | 道と求め | 五〇 |
| 顯眞學苑 | 東照の聖跡 | 五〇 |
| 顯眞學苑 | 十二體講話 | 五〇 |
| 顯眞學苑 | 聖徳太子憲章講話 | 五〇 |
| 顯眞學苑 | 六字釋講話 | 五〇 |
| 顯眞學苑 | 真宗と感前 | 五〇 |

顯眞學苑出版部

昭和十年六月十五日印刷
 昭和十年六月二十日發行

淨土真宗の標意
 定價貳拾錢
 送料貳錢

發行所 京都市上京區 小山西元町四一
 顯眞學苑出版部

編輯者 永井哲二
 印刷者 堀井清

京都市上京區小山西元町四一
 顯眞學苑代表者

京都市下京區烏丸通七條下ル西人

電話四四六八八番
 阪神口大八七五三番

所刷印社文弘

日丁一町錦區田神市京東
 院書治明 所賣發

不許
 複製

露光量違いの為重複撮影

| | | | |
|-------|----------|-----|---|
| 梅原眞隆 | 選如上人 | ・五〇 | 四 |
| 大原性實 | 白道 | ・五〇 | 四 |
| 高千穂徹乘 | 法然上人 | ・五〇 | 四 |
| 梅原眞隆 | 晩年の親鸞聖人 | ・五〇 | 四 |
| 玉置箱見 | 般若心經講話 | ・六〇 | 四 |
| 高千穂徹乘 | 信仰と生活 | ・四〇 | 四 |
| 佐々木實徳 | 佛教の精華 | ・五〇 | 四 |
| 佐々木實徳 | 佛教の精華續篇 | ・五〇 | 四 |
| 竹田豊隆 | 修道生活 | ・五〇 | 四 |
| 津本鐵城 | 道味小品 | ・五〇 | 四 |
| 大原性實 | 讀佛偈講話 | ・五〇 | 四 |
| 荻生隆三 | 愚禿禮讚 | ・五〇 | 四 |
| 玉置箱見 | 孟蘭盆經講話 | ・六〇 | 四 |
| 梅原眞隆 | 大經五惡段講話 | ・四〇 | 二 |
| 高千穂徹乘 | 大經重誓偈講話 | ・五〇 | 四 |
| 北島治夫 | 無碍道 | ・五〇 | 四 |
| 玉置箱見 | 散華樂 | ・五〇 | 四 |
| 朝日融溪 | 道を求めて | ・五〇 | 四 |
| 板敷晃純 | 東關の聖跡 | ・五〇 | 四 |
| 大原性實 | 十二禮講話 | ・五〇 | 四 |
| 學苑同人 | 聖徳太子憲章講話 | ・五〇 | 四 |
| 熱田靈知 | 六字釋講話 | ・五〇 | 四 |
| 學苑同人 | 眞宗と越前 | ・五〇 | 四 |

顯眞學苑修道叢書

發行所 京都市上京區 小山西元町四一 顯眞學苑出版部

電話四六六八番
廣告口番六八七五三二番

不許複製

印刷者 堀井清
發行所 京都市下京區烏丸通七條下ル西人
京都府代表者 永井哲二

文芸社印刷所

昭和十年六月十五日印刷
昭和十年六月二十日發行

淨土眞宗の福音
定價貳拾錢
送料貳錢

發賣所 明治書院
京市神田區錦町一丁目

終



7
8